

Rahma Bourqia and Susan Gilson  
Miller eds.,

*In the Shadow of the Sultan: Culture, Power and Politics in Morocco.*

Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1999, xiii + 331pp.

なか かわ けい  
中 川 恵

I

1956年、44年間のフランス・スペインの保護領統治から独立し、モロッコ王国が成立した。独立時の君主ムハンマド5世の孫にあたるムハンマド6世が現在のモロッコ王国元首である。

8世紀末のフェズにイドリース朝が成立して以来、幾多の王朝の興亡を経て、現在に至るまでモロッコは常に王国であり、王制を支える「マフザン」(makhzan: モロッコ政府)や「王権」は、イブン・ハルドゥーン(Ibn Khaldūn)から、近現代に至るまで、多くの研究者によって扱われてきたテーマである。

19世紀以前の年代記の編纂や歴史研究は、アサビーヤ(‘aşabiya: 部族や氏族による連帯意識)の影響力がなお強かった社会においてシャリーフ(sharīf: 預言者ムハンマドの子孫)であることに第一の正当性をおく王朝を、最終的には擁護する目的をもっていた[Ibn Zaydān 1929-33; An-Nāṣirī 1954-1956]。

1912年からフランス、スペインがモロッコを保護領として統治する。その前後から20世紀半ばまでのモロッコ研究は、列強の植民地支配の必要性に応じて主に欧米人らによって行われた[Montagne 1930; Michaux-Bellaire et Gaillard 1909; Westermarck 1926]。この時期の研究は、支配地域を理解し、植民地統治に役立てるという明白な目的をもって遂行さ

れた。研究者が同時に保護領政府の役人であったケースも多い。部族ごとのデータ収集が精力的に行われ、多くのモノグラフが残された。

この時期の研究が依拠した基本的な分析概念は「部族社会」であった。まず「部族社会」とはレフ(leff: ある地域内で2つの部族同盟が相互に対立し合う形態)に基づいた複数の部族の集合体と理解され、モロッコ社会はこの部族間の対立メカニズムが拡大再生産されたもので、マフザンもこのメカニズムの一要素と考えられた。次に「アラブ」と「ベルベル」は、はっきりと異なるものととらえられ、マフザンはアラブの側に組み入れられている。つまりこの時期の研究では、マフザンはベルベルの大半を占める部族社会の外に存在するものとしてとらえられた。モロッコを、マフザンの権威をみとめ服従している「マフザンの土地」と、マフザンの権威を認めない「スィーバ(siba: 不服従の意)の土地」に二分し、前者をアラブ、後者をベルベルが構成すると考えたのである。

保護領統治末期、つまり1950年代から独立運動の流れのなかで、「国史」としてのモロッコ史やモロッコ人の視点に立ったモロッコ社会の研究が試みられた。しかし、ムハンマド・ラフバービーの研究に比較的客観性が認められるのをほぼ唯一の例外として[Lahbabi 1958]、その多くは「植民地支配をする側」への抵抗から、モロッコ社会を歴史的に凝集させてきた中央権力として、王制を正当化するもので、結局のところ既存の分析概念や枠組みを克服するには至らなかった。

また「植民地支配をする側」そして独立運動のいずれの研究も、王制の権力基盤としてのシャラフ(sharaf: 預言者ムハンマドに繋がる血統)／アサビーヤという保護領統治期以前からの問題提起から脱却し、新しい観点を提示するには至らなかった。

その後1960年代、マルクス主義の影響を受けた研究がみられるようになる。マルクス主義では、周知のとおり歴史を封建社会から資本主義社会、そして社会主義社会へと「進歩」するものととらえるが、マフザンはこの「進歩」を阻む役割を果たすひとつの社会階級として理解された。

「植民地支配をする側」による研究やその後の欧米人研究の業績を批判的に取り入れた研究が発表されるようになるのは1970年代に入ってからであった。

マフザンを「継続的に暴力を安定して行使するシステム」というウォーターベリー[Waterbury 1970]の解釈を批判し、政治的、経済的、社会的な様々な対立を仲裁する「調停者」であるとしたジルマン・アイヤーシュの説[Ayache 1977]や、対峙する社会集団によってスルタンの権威はさまざまな側面をもつというアブドゥッラー・ラルウィー[Laroui 1993]の解釈が、1970年代以降の代表的なモロッコの王権・マフザン解釈であり、研究史において「ポストコロニアル世代」とみなすことができる。

さらに最近10年間に、王制を穏健で交渉可能な体制とみなす研究が発表されるようになった[Rachik 1992; Tozy 1999]が、その一因は、冷戦終結後、隣国アルジェリアの内戦など世界各地の民族紛争の勃発によって、イスラーム運動に対する警戒感が王制の側だけでなく、社会においても抱かれるようになったことであろう。

以上のような研究史を背景に、本書はモロッコにおける国家権力と個人の関係を再検討する目的で12名の研究者によって執筆された。第1部で中世の、第2-4部では19-20世紀の事例が扱われている。執筆者の専門分野は政治学、文学、文化人類学、心理学など多岐に渡っており、権威、聖性、儀式、服従、寛容、暴力など「権力」を規定するファクターが考察され、全体としてモロッコの政治文化についての学際的な分析の提示が試みられている。モロッコの「権力」の問題を総合的に扱った英文の論文集としては本書が最初である。

## II

本書は4部12章から構成されている。

第1章 序論 (Susan Gilson Miller and Rahma Bourqia)

### 第I部 先例

第2章 中世モロッコにおける国家権力の正当性と社会宗教的変容 (Mohamed

Kably)

第3章 君主たちへの語り——アル・ユースィーとムーレイ・イスマーイール—— (Abdelfattah Kilito)

### 第II部 周縁

第4章 保護領統治期以前のモロッコにおける聖域 (Mohamed El Mansour)

第5章 保護領統治期以前の王権と経済——ユダヤ教徒と対外貿易の合法化—— (Daniel J.Schroeter)

第6章 ジンマ再考——19世紀タンジャにおけるユダヤ教徒、税、王権—— (Susan Gilson Miller)

### 第III部 中央

第7章 ダール・アル・ムルクの再構成——モロッコの政治的システムとその正当化—— (Abdellah Hammoudi)

第8章 演技する王制、演出される国家 (M. Elaine Combs-schilling)

第9章 若いモロッコ人たちのライフ・ヒストリーにおける権威 (Gary S.Gregg)

### 第IV部 展望

第10章 モロッコにおける権力の文化的遺産 (Rahma Bourqia)

第11章 1993年選挙とモロッコの民主化 (Henry Munson, Jr.)

第12章 モロッコの政治改革を解釈する (Susan E.Waltz)

序論の第1章で、編者のラフマ・ブルキーヤとサーザン・ジルソン・ミラーによって第2章以下の各章の内容が的確に要約されているが、ここでは大まかに紹介したい。

まず、第2章でカブリーが、11世紀にムラービト朝が勃興し、マリーン朝を経て、16世紀にサーティーン朝が衰退するまでの時期を対象とし、この時期の国家権力の正当性について論じ、象徴によって形成された正当性が、フォーマルな政治構造に依拠した正当性よりも戦争、経済の失策、自然災害などの影響をはるかに受けにくく柔軟性を有していると結論

づけている。

第3章では、アル・ユースイー (Al-Yusi) とムーレイ・イスマーイール (Mawlay Isma'il) のエピソードを文学的見地から分析することで、聖者としての権力は政治的領域よりもむしろモラルの領域においてより重要性を帯びることが示されている。

第4章では、16世紀から1912年までのモロッコにおける「聖域」(hurum)の社会的機能と王権の関係がテーマである。「聖域」は、不正義から逃れ暴力によらない解決を試みる避難所としての機能と、国家が強力すぎたり弱すぎたりしたとき社会に均衡を与えるという、国家と社会の緩衝剤としての機能を有していた。いくつかの「聖域」とその基盤となる集団(多くの場合スーフィー教団)には、マフザンが公認し庇護することで、一種のエリート集団を形成させ、中央権力の支持基盤の一角を担わせた、と指摘する。

第5章では、スルタンの統治権がヨーロッパ帝国主義の挑戦にさらされていた時期に、対外貿易の収益を国家が得る諸手段の合法化プロセスが議論されている。シュローターによれば、「不信者の土地」であったヨーロッパのキリスト教諸国との取引も含んでいた対外貿易を、主にユダヤ教徒に「トゥッジャー・スルターン」(tujjār al-sultān: スルタンの商人)の権限を与えて担わせることにより、イデオロギー的正当化がはかられた。

第6章では、保護領化される以前のモロッコの主要な町で毎年くりひろげられた、ユダヤ教徒のジズヤ(jizya: 人頭税)支払いに関連した儀式と社会的プロセスが考察されている。19世紀後半、西欧勢力の台頭によりムスリムとユダヤ教徒間の緊張が高まったタンジャの町がケーススタディーとされている。タンジャでの税金を納める儀式がいかにかユダヤ教徒とマフザンの間の長期にわたる関係維持に役立っていたかが議論されている。ジズヤの支払いは、ユダヤ教徒共同体内部における社会的地位を再確認し、マフザンと調和的な関係を保障する「保険」の役割を果たしていた、とミラーは指摘している。

第7章で、ハンムデーイーは、バラカ(baraka: 祝福)を受け継ぐためのイニシエーションにおける

師弟関係に関する文化人類学的分析を応用し、「ダール・アル・ムルク」(Dar al-mulk: 権力の家)という政治的概念を考察した。「儀式」と「暴力」を巧みに融合させることにより、「ダール・アル・ムルク」が保護領期により精緻化され、独立後に権威主義的支配の基礎として確立されたことを明らかにした。

第8章は、サーディー朝(1548~1641年)以後、イスラームの信仰に関連した「儀式」を有効に演出し、支配者と民衆が共有する政治的・宗教的な時間と空間を創造することで、王制はシャラフという権力基盤を強化し維持してきたことが指摘されている。

第9章では、筆者が述べているとおり、政治文化は直接的には扱われてはいない。数人の平凡な若いモロッコ人の男女に対して1987、88年にワルザザート(warzazat)で行われたインタビューを通して、彼らのアイデンティティーが心理学者の観点から分析されている。彼らに支配的な価値観は、もはや「伝統」や「家父長制」ではなく「有意義な職業の選択」である。そしてある職業が自分にとって「有意義であるか否か」の判断が、多くの場合、「イスラーム」に照らしてなされており、結果的にマックス・ウェーバーのいう「天職」かどうかという点が非常に重要視されているケースが多い。そしてこのような意識が、国家に対して機会均等、正義の実現、国家の意思決定への参加という民主的要求を生んでいると筆者は指摘している。このような個々人の内発的欲求という観点は、現代モロッコの最も深刻な問題のひとつである失業問題を考察する際、経済分析と共に用いられた場合に、有益な切り口となると思われる。

第10章で、ブルキーヤは、保護領化される以前のモロッコにおけるバイア(bay'a: 忠誠の誓い)、バラカ、聖者廟について概観した上で、独立以後のマフザンがどのように「物資とサービスの究極の供給者」としての国家イメージの形成につとめたかを考察している。様々な「儀式」を政治的に有効に演出することで、「国家が発展の主導者」であることを示し、「近代性」と結びつけた国家イメージを形成し、「民主主義」、「人権」、「女性の権利」などの用語を国家みずからが使用することで政党の言説を弱体化

し、イスラーム教育・組織・行事を国家が管理することでイスラーム運動の社会への影響力をそいできた、と分析している。

第11章では、マンソンは自ら国際選挙監視団の一員として監視した1993年の選挙を通して、モロッコの民主化プロセスを考察している。カサブランカのハイ・ハサニー (al-Hayy al-Hasani) 地区および(ラバトとカサブランカの中間に位置する)ブズニカ(Buzniqa)でのモロッコ当局の選挙介入と国民の反応を描写し、マンソンは、選挙が国民の意思を反映しない場合、選挙は社会の鬱積した不満のはけ口となるどころか、それをさらに悪化させる危険があり、従って当局の勝利を保証するかに見える介入が、隣国アルジェリアの例にあるように、逆に当局を危険にさらす可能性がある」と結論する。

最後の第12章では、人権問題についての当局の対応にどのような変化がみられるのかが分析されている。人権問題は1990年頃からようやく好転の兆しを見せ始めた。代表的な反体制派とみなされてきた左派の諸政党、諸集団が当局に容認されるか弾圧されるかの境界線は、イデオロギー傾向よりもむしろ、王制やサハラ問題などモロッコで政治的タブーとされる問題に対する見解や集団の影響力や規模に左右されてきた歴史的経緯があり、これはイスラーム運動に対する当局の態度にもあてはまる、とワルツは分析する。国際世論に押された形で、国王は1990年人権諮問審議会 (Conseil Consultatif des Droits de l'Homme : CCDH)、93年人権省を設立した。ワルツは、CCDHや人権省の設置の主要な目的は、人権の問題を当局が管理することであり、数度の憲法改正を経てなお多大な権力を国王が握っている状況ではあるが、人権に関する一連の改革は、政治的な表現の自由の保障への突破口になっていると評価している。

### III

「ポストコロニアル世代の分析枠組み・方法論を用いて」、「国家権力と個人の間を再検討する」という本書の意図は、おおむね達成されており、いく

つかの興味深い指摘を学ぶことができる。

第1に、「正当性」という概念のモロッコの文脈における理解である。既存の研究では、「王権の支配には、最終的には人々は従う」と考えられてきたが、実は国民が政治的秩序の正当性をどのように理解しているかに、かなりの程度左右される。さらに、先祖から受け継いだバラカも、それだけでは体制を維持させるのに充分ではない。むしろ国民がどのように王権を認識し、そしてそれが社会に浸透し、強制力として機能しているのかどうかによるところが大きい、という点である。

第2に、社会におけるいわゆる周縁的要素(例えば、ユダヤ教徒、奴隷、女性など)の社会への統合について再検討することで、国家権力と従属グループとの関係を規定する新たな要因が提示されていることである。つまり従来多くの研究で論じられてきたように経済的必要性が常に中央・周縁関係を規定する要因であったのではなく、地理的位置、共同体のリーダーシップの役割、文化的価値観、平和希求、共同体間の調和などが、経済的要因と少なくとも同程度の、場合によってはそれ以上の重要な規定要因であった、という指摘である。

「ポストコロニアル世代」の分析枠組みや方法論の採用という点に関しても、王制の権威という他者を、社会が(自発的に、あるいは非自発的に、いかなる形にせよ)自己としてとらえている限りにおいて、権威の正当性が成立し機能する、という認識が執筆者たちに共有されており、編者の所期の意図は達せられたと評価できる。

最後に、残念に感じられるのは、権威主義体制の権力基盤として「ダール・アル・ムルク」という概念を再検討した第7章、権力の正当性の演出について指摘した第8章、権力の言説戦略を扱った第10章を除いて、王制の側からの正当性の「操作」という点についての考察がもう少し掘り下げられても良かったのではないかとこの点である。しかし論文集という紙幅の制約から考えれば、評者の感じた多少の物足りなさはいままでの研究で軽視されがちだった「社会における権力の受容」という観点を提示した本書の貢献を損なうものではない。

## 文献リスト

- Ayache, Germain 1977. "La fonction d'arbitrage du Makhzen" (Actes du colloque "Modern Morocco; Recent Research in Politics, Society and History").
- Ibn Zaydān, 'Abd ar-Rahmān 1929-33. *Ithāf A'lām an-Nās bi Jamāl Akhbār Ḥādirat Maknās* [メクネスのエリート人名事典]. al-Rabat: al-Matbaah al-wataniyah.1-5.
- Lahbabi, Mohamed 1958. *Le Gouvernement marocain a l'aube du XXème siècle*. Casablanca.
- Laroui, Abdallah 1993. *Les origines sociales et culturelles du nationalisme marocain: 1830-1912*. Casablanca: Centre Culturel Arabe.
- Michaux-Bellaire, Édouard et H. Gaillard eds. 1909. *L'Administration du Maroc: le Makhzen*. Tanger: Imprimerie Marocaine.
- Montagne, Robert 1930. *Les Berbers et le makhzen dans le sud du Maroc*. Paris: Librairie Felix Alcan.
- An-Nāṣiri, Aḥmad b. Khālid 1954-1956. *Al-Istiṣā li -Akhbār Duwal al-Maghrib al-Aqṣā* [モロッコの王朝に関する詳細研究]. Vol.9. Casablanca: Dār al Kitāb.
- Rachik, Hassan 1992. *Le sultan des autres*. Casablanca: Afrique Orient.
- Tozy, Mohamed 1999. *Monarchie et islam politique au Maroc*. Paris: FNSP Fondation Nationale des Sciences Politiques.
- Waterbury, John 1970. *The Commander of the Faithful*. London: Weidenfeld and Nicolson.
- Westermarck, Edward 1926. *Ritual and Belief in Morocco*. London: MacMilan.

(日本学術振興会特別研究員)